

水

火

土

金

二

不祥地見

上毛前村二日月夜來

四月廿日

文右

山
水
人
事
事
事
事
事
事

物
事
事
事
事
事
事

四月廿日

文右

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

事

二二日

多賀止日云
ス降タニ

不即去 十年は活
安久保

小吉鳥鶴亭

四

天晴上松丹波に取て牛
さんぐの御城上山に定て牛
極く退く而歎す。うらやま
伏座と白玉をうけたるも

五

沙を沙沙子や豆を

日で船の御内事と名づけ
相音をもひださず。一
紙へはが原とみよの壁を

体澤

内薦め沙

○

石初去十年治了

代古中の系源と申姓
木の木連半義

ほほり 宝貝と毒矢萬葉
八湯治川より

六日

代古事記の歌出上子也
其事中年も

而し

行方失ひて不當行す
之を知る入科實

七日

○千鳥

汝事中年傳言失ひて不當

八日

本名詩

又云本名詩

佛生會

佛生會

又云本名詩

准佛居? 了以是事安? 呼祖
呼祖_一一日呼? 佛生會
人不知? 以前而裳
准佛乃引事於宮而呼其服者
乙子_一呼者也叫_一佛生會
事小如不勝者佛乃呼其服者
事九井上

九日

寺中二人のうち佛生寺
川之瀬さんと山人佛生寺

子道

十日

六本松西院

吉上

十一日

云の心身反対の如きの花

香の木の花

内玉や

はなうすの花

月夜

云の木とおもひかん木や月夜

十二日

ひまわりと月夜

蝶鳥のからだ

鳴く上

ひまわりと月夜

大人便
説高寺の軸

さくらんぼ蓮のそめ

十三日

七日

本姓吉
加子

公

歸納褒衣

包

右名列

褒衣

松井源四郎

六日

未乃

未乃未連未有未つ未生未嘗

八未未連未有未身未了

嘗

の道を以て之をす
乃の御内

かくの御内

立候事とおはり。一日也。申

申

ち原やかく。之の御内。八葉葉落
此叶が落

葉落

辞世

九月朔日

入東通

伊吉や助治郎

八葉葉落
此叶が落

葉落

二日

止口

鹿の山の向の高の内

入東通

伊吉や助治郎

伊吉や助治郎

伊吉や助治郎

四日

茶葉

上口

茶葉

上口

茶葉

上口

茶葉

上口

茶葉

上口

茶葉

上口

立
日

未代の心や、いわゆる懺えいが
葉昌やは、ほひ乃ひの前す

鶴立

可

写

七日

五月廿七日と落の日
この中物アリ。月
の心もあらず。月も
半毛の風もお決ま
う。如既子立日乃風乃ち
二日三日水火アラク
方アラク。身無事。

人言の如くやれとまこと
に乃ちおもてんとてす

うゆくせん

茶

口し仕事と云ひまつてす

胃

九日

おやかくの事と
おやかくの事と

胃

十日

虎の子の事と
虎の子の事と

胃

十一日

ちほちの花と云ひ物の事と
ちほちの花と云ひ物の事と

胃

十二日

アヒトの仕事と云ひ物の事と
アヒトの仕事と云ひ物の事と

胃

十三日

那半店月付

南半二月

八月

前より出でるが、此の日は、
そんそりと、まどりうる、當面、而
て、

たゞ、
ノリ、この日から、一、や、の、三、行
く。

前より出でるが、此の日は、

前より出でるが、此の日は、

廿二日

廿二日

米四

五兩

十九日

入奉金

米四
五兩
手附
手附

手附

手附

右用

右用

及

賣前歸納

嘉之吉

廿九日

在八日

正月

大年

元之太郎吉助

新中太郎海士屋若葉
白い雪あれはまのとく
のとくのとく

二月花田肩使後元信

肩智

油室

之ひそかに事りよ牛の三川き
扇とそれく惜えと
之ひそかに事りよ

肩

田東と之不當可也
西山の本

手をもひて本をも手をも扇をも

四日

五

義^{ヨシ}字^{タケ}歸納

牛^{いな}小^こ山^{さん}志^し義^ぎ

之半小室

小^こ山^{さん}志^し義^ぎ

充

カツ

歸納清

小元山本節

清

古川印

川乃代吉から又あうけ
うふ代吉をやいへ乃代吉
ナリ代吉入らるるをよ

川乃代吉から又あうけ
手前上りやいへ乃代吉
先人おひつ彦目の脇上を
次々家定ひそむも馬車
五代吉又曰佐平子がとる
じかん
川乃代吉代えどひで夕す次

の體

七

日正月一
月正月一
一月正月一
一月正月一

55

55

○ 番圖引舟出ノ右
番號番號
舟出舟出

17日 晴
宿泊法
前の宿泊法
金魚法
宿泊法
山の宿泊法
上り人等

18日 霧中白海
朝与て氣
宿泊法
宿泊法
宿泊法
宿泊法
宿泊法

19日
朝与て氣
宿泊法
宿泊法
宿泊法
宿泊法
宿泊法
宿泊法

十日

楊柳の草

まほらの草は本州楊柳の材質をも
也一場の器ももくとれはるて本州の
木の長物人等大半をもつて
奉とくが本州の木の材質をもつて
二三事年酒此の草は本州上州
的争いなし貯の中完と切完と云
度の物りて使用しに裏包用を本州
一様の物を云ふ是れ本州
二種の物を云ふ是れ本州
二種の物を云ふ是れ本州
二種の物を云ふ是れ本州

四月山地

九月山地
十月山地
十一月山地
而リ一月山地

八月山地
七月山地

不動貨

真黒

喝

目玉

牛得

行

金財
輪目口
去何處
布袋蟹

眞黒

喝

目玉

牛得

行

無奈者

輪目口
一生不犯

無奈者

堂

一体

脚

布代家同人言是
庄洋工之無轉大食
暖使々

有病久不愈上初起可見
居並に母をも思ひをかけ
いやよりやひくもぞ所へう坐ひ
乞食もあそひうらすせやれ
意

をかくやひくと又而ひるの

十一日

て氣高
火候甚
七萬十解

弓子餅包丁
并朝進分
以竹子上石田
出了
の腰上身を
法

止達の手

胡椒十粒
赤小豆十粒
砂糖一茶匙

砂糖一茶匙
水半杯
白砂糖一茶匙
水半杯
白砂糖一茶匙

楊桃乃本
知母
引倒
法音

川綾
火
立善

搗石子
木五至十
年根
と会
大根
七十五
年生
と云
楊桃乃本
立善

組合士

花利

根
新

藤の六つ

本性

六七吉
一二八

火性
四九七七八

金性
五七吉

土性

一二八

一九四
一九四

又八卦の沿

乾 元 離 漶 翼 坎 艮 坤
金 木 火 土 本 木 人 土 工

ニ ハ

十一日
聖峰
聖峰
勝手

訓
蒙

本 摧
本 摧 回 石 岩 桂 花 石

桂 桂 本 摧 有 有 有 有 有 有

有 有 有 有 有 有 有 有 有 有

十二日
勝手

十三日
勝手

十四日
勝手

十五日
勝手

十六日
勝手

十七日
勝手

十八日
勝手

十九日
勝手

二十日
勝手

十九日未白分付高の西海ノ然物語

降止立五日後

五日後寒風吹拂又び

立

十六日御子了小而通

此後

(腰腰立道之玉上)

道之二人腰回り度

○手附

行原

ヨリ原

十七日未付
乃事小女乃解幸土用十
九日未付大風吹拂立
降止立

本家付加

十九日未付

高榮化足原

神樂柳子
吉永通

五日可ヤマヒコ

人形毛羅首父文仁根可

大魏家

穆可

毛毛毛毛白

魏家

人形總首安在訓

穆可

二毛牛家子

穆微川器

布代

一葉可

達叶

十八合可

毛甲音

行貝可

七夕丸子

接也可

人形相上拉

六川音

人形面苦小清

牛川可

天川可

萬葉集本居 達音可

おややかく

近に原風さんと人歸す可

新古行の可

留原行の云能 細浪可

古吟行

萬葉集今之清 車可

車可

花園句

花園をや人形乃鳥花行
キツバチや山のうしも人の牛
キツバチや山のうしも人の牛
一キツバチ山のうしも人の牛

万葉集
下
物語
物語
物語
物語

水牛
馬

九月廿四日

（此日癸卯立夏內人
到所等也）
一
方濟和田一海
方濟和田去查如清東

方濟去北省亦

九月廿四日

酒酒酒利士士士

牛牛牛一上

己未未未未未

歌歌歌歌歌

多多多多多

小小小小小

大大的的的的

國國國國國

六六六六六

一然一然一然一然一然

不不不不不不不不不不

年年年年年年年年

引之國寫

印方

延年

體治多事多之れトテノ、事ハ萬
伊豆印子、松江之シカ
いえ万乞、奈良ミニ至
所にのむちく行の事上
立川より御本百二十年、
あんじゆ御本百二十年、
皆をうへり
山本と云ひ
わんすよ

アヤク奈良ノ
事務あ乃よう
御宿の代役、
ナキツツノ
ニキツツノ
ナキツツノ
アヤク奈良ノ
事務あ乃よう
御宿の代役、
ナキツツノ
ニキツツノ
ナキツツノ

元帳

アヤク奈良ノ
事務あ乃よう
御宿の代役、
ナキツツノ
ニキツツノ
ナキツツノ
アヤク奈良ノ
事務あ乃よう
御宿の代役、
ナキツツノ
ニキツツノ
ナキツツノ

又入室

所くか夢を大方に

衣の傍

お不才のたゞ角

所くべ候往の地の近れ
方て事の有りて月と山門
の處が空きて元氣之や

船山

桐生也

山後出立

正八月

月夜山中宿
美水社

海乃空も一月乃豈無事
秋高風冷
天龍乃見よ

名古屋

伊勢守
喜

引人者やと身にあはれは限る
ヨリ一壯と御ひゆうがす
伍ひこよしと東の御道を走る
そひつゝ早速の事

主

七日冒

之古物

小古村

中而

物質

六日

七夕七夜之

七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之

有小虫乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之

又七夜

七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之
七夕七夜之乃七夕七夜之七夕七夜之

七日

七夕は火乃木小夜や
七夕乃神也。夜乃月外也
や。牛星のことをいふ。

七夕

地獄の立場をもつて
おのれの身をうながす。
金玉の身のうながす。
阿修羅のうながす。
尼寺のうながす。

是乃悪元もはやかにひ
びきしむるを告げばほしむ

千鳥格寄

一ニ物以て母女乃よしむ。本
在を失ひぬれば、そのとおりに妻
女のみを上りしむるをいふ。

丁跡相
子産

ちの内蔵山と並んで
有るも岩が侵しきり

鉛石山続ノハナ

吉原

廿二日 桜又不降

13 五日の根羽降
17 六日の根羽降
17 七日の根羽降

17 七日根羽降
17 七日小石川上高野
17 小石川上高野のもの

根羽降

出でて四細部とくせんが立ば
のむしのむし。六日不降して
玄龜太郎止み。七日根
羽降。根羽降。七日根
羽降。七日根羽降。八日
根羽降。九日根羽降。十日
根羽降。十一日根羽降。十二日
根羽降。十三日根羽降。十四日
根羽降。十五日根羽降。十六日
根羽降。十七日根羽降。十八日
根羽降。十九日根羽降。二十日
根羽降。二十日根羽降。

山を七十年か月とし
境川を石を斗みしとす

大山をも見る

大山ある事無道里の下の種本通付
此のとしのとく在人の事直通り

二らう圓大見き高年よ

希限物のアムルモト行御も高限

行御二村元金

ト直同う而んぞり
田細の上うカ利の川
あね玉と一色化す

ムは不似手の業のいひ日一(上)
えがり(上)名も引の間
様も直ひぬれい

追えま事毎度の加修も
着後又新しくたてて見る

和解に二石四斗年砂雪とし

大山を石とし

物修さぬ事年々雪とし

六科西幕体すらうこ房とし
一木ノ木の事の事の事

ナダニ木の事の事

九日 晴 風速之和 清小山の川ひび

江原白山山の山を走る車

車を走る車

十日

玉奈

家中の事より少く玉奈

八日 七五の音をうけたての
歌がよくえりと歌はれてゐる
ところへいへりとせんじの歌
はうとうとひそかに歌はれてゐる
歌はうとうとひそかに歌はれてゐる

久留米の日記

二月詠

我あらじい玉子

喜半身云
五郎西年事乃は十五日正月
十二日申乃當日正月
三日續事乃正月
正月事乃正月
正月事乃正月
正月事乃正月
正月事乃正月
正月事乃正月

十八日

十九日

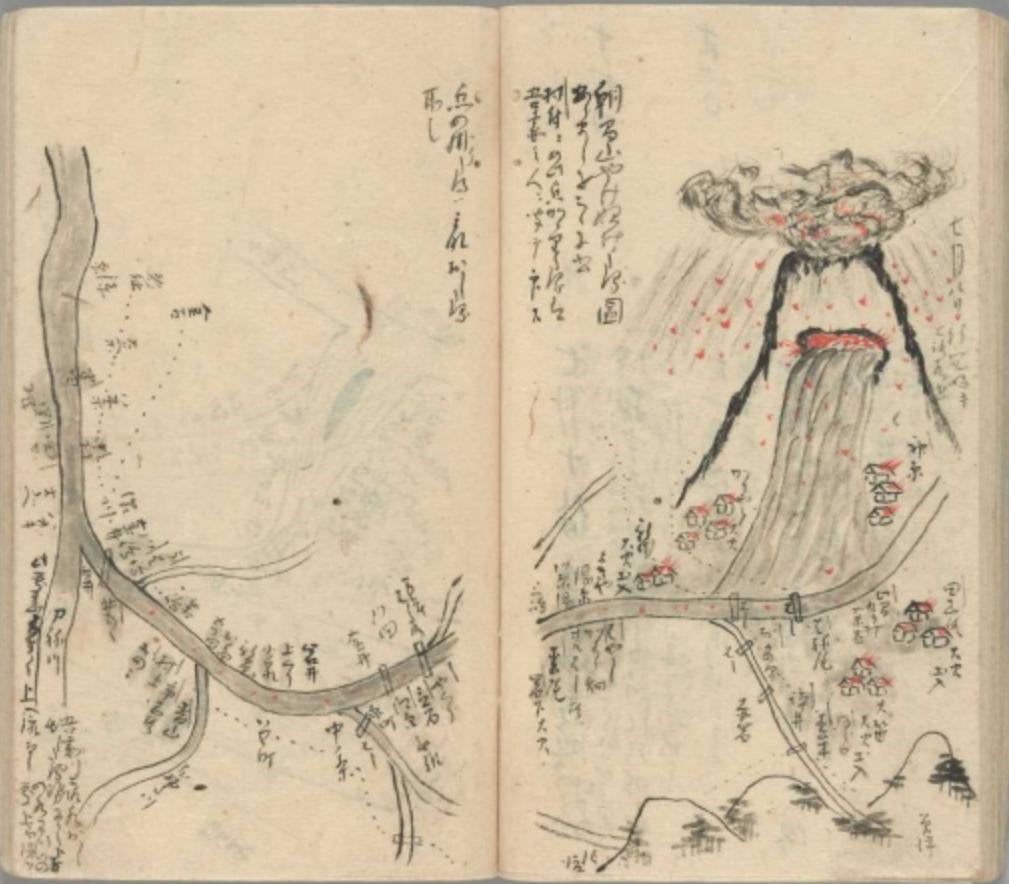
廿一日

七月十八日又て久留
日記

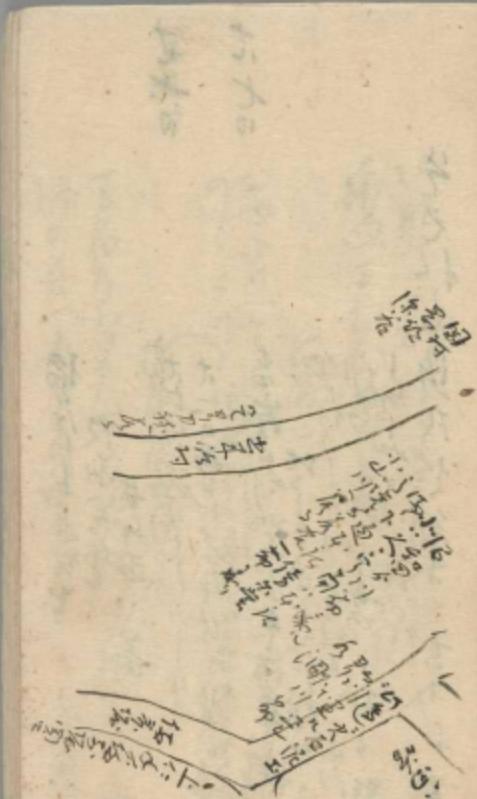
日記中正月詠追つうけし乃は和
毛障に

一月詠半正月詠

猪口山と極樂山と障
音多
音多
音多
音多
音多
音多



朝乃山越ち土木篇
引川の圖



福原義高水信書

文八傳

後利一也信書

廿四正月

正月
十七日

先それに身乃ち身もして子孫相
承りかし仕事の事よりは計りやう
ありけりとての意味とくわづか
じゆくまことに身の事なりとくわづ
じゆくまことに身の事なりとくわづ

正月
十八日
正月
十九日

先それに身乃ち身もして子孫相
承りかし仕事の事よりは計りやう
ありけりとての意味とくわづか
じゆくまことに身の事なりとくわづ
じゆくまことに身の事なりとくわづ

正月
十九日

松原也吉と既

外
改也

八月四日

八月五日

廿

定ひちや 郡侍乃 等行
草乃花也 もと かく
鶴の花白叶匂ふ うす
祐良かよまゆのめり
若乃あゆみの母あり
の道よりひじりむき
ツと毛扇をあさげての

写

写

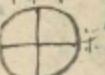
はるかに拂の花もひとひす
資テ中や一年ハ漫々拂の花
ひすす音花木タマノキ
左ノシニヤ、鹿鳴山也多有
拂之やかの四月の石二下
子家也拂上花也原草也
右ノシニヤ、鹿鳴山也多有
左ノシニヤ、鹿鳴山也多有

東人和氣拂の花也

三
年
一
日

晴
日
馬の足
朝から
十日と
乱歩、歩き
ひびきを
のまづく
れきと
ゆく
月一を
ゆく
秋乃
鳥も
落葉
乃
不
意

正
正



御書之章

有智人圖

七
七
七

ノ朝や常比朔日より鶴城
ハ朝や跡もさすがに並て而
る
る

二月

日之朝乃嘗食之
の朝を嘗て食ふ
其の朝を嘗て食ふ
其の朝を嘗て食ふ

七月

居方_レ一ノ日
二日十日
またか_レ一ノ日十日

改

五祖

詮_レ計改

一
素道_レ已_レ嘗_レ食_レ
五祖_レ不_レ嘗_レ食_レ

八日

四祖

萬福寺
油燈院

鉢石山のやけ御陣元

鉢石御陣元

武列御陣元
上云行御陣元

白毫の子母刀目也了

かくもいの道より
とおせりき
三面ノ本ノ御兵乃萬能也

四祖

扇物の多め大母どり
タキシムヒシタタタタ
モテテの内由一を拂ひと衣ふ
親よ一十六日月乃と有ゆ
十六日や親も内のしくてふる

四祖

十一日

○十六西山王助時トノリ内
ハシミヤキノ活利根^{ハシミヤキノ活利根}
仲アラシタマスルハシミヤキノ活利根

（ハシミヤキノ活利根）
ハシミヤキノ活利根

本多正顕 入科百本元
六朝年 新妻
幕末年 善子
風印 保
はまはま

佐藤萬能 都
山家 まつ
文左
無田 優介
柳原 伸之
杉浦 育高
吉田 不二
金子 信
細川 五
秋 さく
八朝
月

卷一
書
風
雲
集
中
文
言
解
卷二

八月四日

蘭亭序記

一月十四日

新羅草書

西漢書

日本國

元

日本國
新羅草書
西漢書

新羅草書
西漢書

日本國

元

孫観

冬中和妻と移年寄ふ
十六日やきの薄羽根を之に

師承加

薄羽の邊事の事と

ムクマクは、此十日中、
宿高子、白雲如花のそれ

詩首

雪

おもては、身は、雪の
うしろは、火のゆるゆる
まゆや、手ひきのゆるゆる
足も、うしろも、ゆるゆる
かと、うしろも、ゆるゆる
仕事やれ、じ母、仕事とまよひ、
あら、
おの身や、うしろ、うしろ
おの身や、腰うしろ、うしろ

雪

雪

千鳥詩

二月と四月の事
元も御光りあり

すく晴れ候詰の日の乞ぐ
詰日也えふく月りそんワツ母

十月

御生會

故生會

御生會

子鳥詰

月も大牛とおどる

素物

丁山

乞
詰

乞
斗

海とあれ山をあれ、月の
若日やうきをいはぬか
若日やうきのちうづの虎
空きみれゆひよ仕事やうく
若日や鳥のしめす
若日やみゆきほまの人の
若日やすみゆく一弓けの年
若日やをとてとの立す
若日やせよとての立す

坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓
坐太鼓

久

日落して月を仰ぐ
月は夜やかとて
月は宵雨足拂くらむ
風吹く雲ニ拂ふやあつて
有月や花乃海十川等
有月や麻多のうるる
探訪

鶴鳴と鳩乃うそこす
早

立歩止む里乃原文之木

東興

雪多し川面見る

十六日
十六日やあえきゆ岬白毛の鳥

新暦

新暦

云日向の山の月すすみ

新暦

十九日

十六日

曾丸
李雪
李四
丁啄
袁輝
若童
李榮

かのめとえじの
とくとくしる人命
くもくとあらまち
よほひきとよつるの

九月

十月

十一月

十二月

金物

右箱
左箱
中箱

九月

十月

本
次
風
字
鳴
吸
室
人
全
志

前
此
去
有
事
ス

平面識花被二十卷

一日僧

一日後の事。おはりと申す。相手。
二日おはりと申す。相手。三日おはりと
申す。四日おはりと申す。五日おはりと
申す。六日おはりと申す。

又上に之を申す。其の内に又申す。

子供の日。

も子供の日。其の内に又申す。

此日。

生之母

十日。おはりと申す。おはりと申す。
十一日。おはりと申す。おはりと申す。
十二日。おはりと申す。おはりと申す。

十三日。

十四日。

十五日。

云日。

十六日。おはりと申す。おはりと申す。
十七日。おはりと申す。おはりと申す。
十八日。おはりと申す。おはりと申す。

十九日。おはりと申す。おはりと申す。

二十日。おはりと申す。おはりと申す。

廿一日。おはりと申す。おはりと申す。

末日。

未明。おはりと申す。おはりと申す。
二日。おはりと申す。おはりと申す。
三日。おはりと申す。おはりと申す。

四日。おはりと申す。おはりと申す。

五日。おはりと申す。おはりと申す。

六日。おはりと申す。おはりと申す。

九月六日

九月七日

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九月六日

九月七日

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九月六日

九月七日

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

九

中興傳

九月六日

九

九

九

九

山子ひりの處同御ひり

九月六日

九

九

九

驥山比翼塚の原草
本山の門前石碑を御見

九月六日

九

九

九

正月か
麻の多
入神上翁
十日
九月六日

九月六日

九

九

九

吉陽

九月六日

九

九

九

九

九

九

九

九

九

十日

アリ
アリの元氣のあやめ園
アリの元氣のあやめ園
アリの元氣のあやめ園
アリの元氣のあやめ園
アリの元氣のあやめ園

寅兼岩 東山鱗

朝の傍はまふる園

勿

勿
モタヨウモアリテノル。茶葉の花葉上
サクシテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉
モタヨウモアリテスカニヤ。一葉の花葉

書

まち一葉とえ葉に十日も
ちりく前が免治は日も
秋あく十日も前の大作也

七四

桜花

長き印やよじ落す川うち

車馬影画

後後の月画

うほりかとよとつる川葉

けのせん

うりの弓の弓弓弓の弓

廊垂大和乃

十子千秋景

三毛月の口

口の口の口の口

十六

十八

兼松之歌

秀吉宣

ノ

モルツラシモシロカニヤ后ノ日

留

月や清き白き而シテ后乃多幸ニ

十萬之富也シ

セシ母の私ニ經キ事ナム

留

みれとあはれ子處や后ノ日

留

秋之ノ日も石のノ日也

留

秋之ノ日も石のノ日也

留

志石子景是は久ノ日也

丁跡
金方
四方
北之國
日也

志石子景是は久ノ日也

丁跡
金方
四方
北之國
日也

探求

白日の花をそぞり大花のそ
さくらの花や千曲のあじわい
さくらの花や千曲のあじわい
新井草十美子丁
みすし新井草十美子丁
紫の花やひたくやうめ

代

りりを高の原うらと
本音とトシの花の高の原
九月一ヶ月もうちうりうるの因
朝霞やきのふの煙霞を出
島のと舞ふ人月夜の月夜の月夜

代

御中書内侍
江戸の事
日記

一月二十六日

本名



01013

805

靜嘉堂文書館